

1. イントロダクション

本論は『處容歌 (Cheoyongga)』と『アラビアン・ナイト (The Arabian Nights)』に見られるエロティシズムを考察し、『處容歌』とアラビア文化との関連性を明らかにすることを目的とする。『處容歌』は、八言四歩格の朝鮮詩である。東海の王の七人の息子の一人處容 (Cheoyong) が、879 年に Wongang 王とともに首都へやって来て、有能な高官となる。そしてついには数々の功績と政府を支えた褒美として、大変美しい女性を妻として与えられる。当時“Keupgan”という名の大官として處容は政府に仕えていたが、帰宅が遅くなったある日、妻と Yeoksin という悪霊との不義の場を目撃してしまう。だが處容は、怒ることなく歌や踊りをふるまい、それが悪霊を感動させ、自らの不適切な行いを後悔させることとなる。この詩は、単なる文学作品ではなく、いまや朝鮮の宮廷での祝宴の一部として大変重要な文化財となっており、歴史を通じて様々な次元を持つテキストへと発展してきている。そのため、この強い影響力を持つ『處容歌』の伝統の起源については、多くの考察がなされている。その答えの一つとして考えられるのが、朝鮮に直接的にまた間接的に多くの影響を与えたアラビア人による文化的影響の余波から、この作品が生まれたということである。本論では、『處容歌』を『アラビアン・ナイト』との関連で考察し、スーフイズムという影響力のある大きなアラビアの要素が詩のなかで表現されていることを明らかにしたい。

過去の二つの論文において、私は『處容歌』を朝鮮民話という限られた観点からではなく、アジア文化というより広い物語論のパラダイムにおいて読み直し、その芸術性を評価することを提案した。この種の研究をおこなうには、詩が持つ真の意義をつかむ上で、中世アジアとアラビア文化の広がりとを考慮する必要がある。つまり『處容歌』は、シルクロードを通してもたらされたアラビア文化をふまえて再読されねばならない。『アラビアン・ナイト』との関連で、この詩を比較研究的に読むことで、作品が持つ独自の文学・文化的特徴を理解することができるだろう。

2. シルクロードの吟遊詩人、處容

よく知られているように、シルクロードは、紀元前 1 世紀から極東とヨーロッパをつなぐ主要な通商路であっただけではなく、その二つの世界の間で科学や宗教、技術のやりとりを可能にした通路でもあった。また多くの歴史的資料から、『處容歌』を生み出した新羅が中国を経由して、アラビア文化との交流を盛んにおこなっていたことも推測される。アラビア文化は、当時仏教にも多大な影響を与えており、のちの朝鮮王朝の多くの文化的側面に浸透していることも明らかになっている。

多くのアジアの国々が、新しい外国文化を輸入しようとしており、『處容歌』の大きな魅力は、アラビア文化に基づいた異国趣味に起因していたといえるかもしれない。当時は中国からの影響がやはり最も強かったが、重要なのは中国がアラビア人と大変深い関係を持っており、彼らを朝鮮へと橋渡しする役割を果たしていたということである。『處容歌』と『アラビアン・ナイト』との間の直接的な結びつきを示す具体的な資料を探すことは容易ではないが、両者の文化的な交流は、例えば音楽に見出すことができる。すでに明らかにされているように、『處容歌』において見出される文化の形成には、シルクロードを経由した音楽の交流が明白に関わっている。例えば、唐を通して西洋音楽を輸入した高句麗のように、新羅にもいくつかの西洋楽器が持ち込まれている。“Bakpan”と呼ばれる打楽器、“Tangbeepa”や“Gongwho”といった弦楽器、“Piree”や“Hoengjuk”といった管楽器が、新羅中期の音楽に用いられている。当時の主要な娯楽形態を記した *Hyang-ak Japyung Osoo* によると、Keum Whan (玉投げ遊び) を含む五つの人気の娯楽があり、それらは西洋に由来するという。特に、Sanye は、今日でも伝統的な朝鮮芸能としておこなわれている。これらの事実は、新羅の時代における西洋の影響を明らかにするものであり、したがって『處容歌』の成立に両者の文化的なつながりがあると推測できるのである。

アラビア人が技術的に世界を支配し、その文化が中国を経由して新羅や朝鮮にもたらされていた中世において、『處容歌』とアラビアとの相互の結びつきを示す最も大きな手がかりは、イスラム音楽の影響を受けた宋や元王朝の音楽形式に、当時の朝鮮音楽がなっているという事実にある。朝鮮の民衆音楽は、元の音楽に由来し、またその助けにより栄えた。その元の音楽は、中国やアラビア、モンゴル帝国との密接な関係により生まれたものである。Myungjoon Kim は、*Akjanggasa* という著作のなかで、「朝鮮の民謡と唐や宋王朝といった外国の音楽との融合」を説明している。彼によると、それらの関係は非常に深いとのことである。こうした点から、『處容歌』がアラビアの調子や色調に富んだ中国音楽の影響の結果として生まれたと結論付けることができる。

3. 『處容歌』におけるエロティシズムのモチーフ

朝鮮文学において、『處容歌』は、處容のような異国風の人物による性的なモチーフを含んだ、男性による独白をとり入れた最初の詩である。明らかに、エロティシズムが作品の最も顕著なテーマだが、そのエロティシズムはどこに起源を持つのだろうか。本論では、それが『アラビアン・ナイト』の原型である『千夜一夜物語 (A Thousand Tales)』の性的な雰囲気やモチーフに由来すると仮定する。『アラビアン・ナイト』の起源や形成をめぐっては多くの議論がなされているが、『千夜一夜物語』は、インドに起源を持つと一般的には考えられている。

インドの民話は、『處容歌』より一世紀早い 8 世紀にイスラム的な特徴を帯び始めた。インドは、中国からの仏教巡礼者たちのメッカであり、そこには西洋や少なくとも西洋世界へと旅する多くの朝鮮人がいた。インド文化は、広範囲のイスラム文化を吸収しており、イスラム神秘主義の中心となっているスーフイズムを生み出した。この神秘的なスーフイズムが、『アラビアン・ナイト』を生み出した文学的雰囲気の底流をなしている。

『アラビアン・ナイト』が書かれた時代にあたるアラビアのアバス王朝は、モンゴル人が 1258 年にバグダッドを攻め落とすまでのおよそ 500 年続いた。その歴史は、750 年から 1055 年まで政治と文化が栄えた金の時代と、1055 年から 1258 年にかけて次第に衰退していった銀の時代の、主に二期に分けられる (Heuman Sa 249)。金の時代は、朝鮮においては、祝祭的な文化が栄え、その結果『處容歌』が生み出された時代にあたる。元 (モンゴルによる統治の時代) の影響が、歴史・文学・文化的側面に広く現れているとするなら、『處容歌』と深い関わりを持つ歴史的な出来事や場所も多くあるに違いない。特

に、中東と中国の一部を占めていた都市サマルカンドは、『アラビアン・ナイト』でも『處容歌』でも言及されている場所という意味で注目すべきである。シャリヤール(Shariyar)王が統治していたササン朝は、物語の主な舞台であり、実際には中国側の地域に位置していた。また、中国という名前は、「せむしの物語(The Tale of a Hunchback)」のなかではっきりと言及されている。

物語の構造に関して言えば、『處容歌』と『アラビアン・ナイト』の間には多くの類似点がある。『アラビアン・ナイト』は、口承であるため、さまざまな変種や版が残っている。この『處容歌』と『アラビアン・ナイト』をテーマやモチーフの観点からいくつかに分類すると、両者の類似点が明らかになる。『アラビアン・ナイト』は、「シャリヤール王とその兄弟(King Shariyar and his brother)」に見られるように、妻が夫を裏切り、性的関係に関わるという物語構造を持つ。このモチーフは、文字通り『處容歌』の主要テーマである。語りの形式に関しては、『アラビアン・ナイト』は、物語内物語で、散文と韻文とが混交し、口語体という特徴を持つが、それらすべてがまた『處容歌』の特徴となっている。内容については、最も顕著な類似点が、王と處容による窺視、女性の登場人物による不義、そして女性の身体の描写である。『處容歌』は、“Garari Nehierha”と呼ばれるポルノグラフィ的描写を含み、それは多くの現代の読者にとってすらショッキングなものである。同様に、『アラビアン・ナイト』も、多くのスペースを女性の身体の詳細な描写にあてている。特に、人間と神との性的交わりは、両者に見られる共通の特徴であり、世俗的なものと宗教的なものの交わりという点で、文化的に重要な意味を持っている。性的逸脱を犯した登場人物が、生の神秘や真実の重要性を悟るようになるという事実もまた、両者の間の最も意義深い類似点といえる。最後に、重要な類似点として決して忘れてはならないのが、両者が物理的な力ではなく、言語によって、すなわち言葉の力によって、性愛の問題を克服しているということである。

はじめに、モチーフにおいて『處容歌』と『アラビアン・ナイト』を結びつけるものがある。『處容歌』で描かれた性的逸脱と配偶者の裏切りは、そのような概念が朝鮮文学においてはじめて登場したものである。それは三角関係という問題であり、「愛する人が誘惑され失われる」というテーマである。そのモチーフは、中東を抜けて東の方へと伝播していった結果、この二つの作品の橋渡しをしているのだが、それを示す具体例が存在する。それは『ソリム(Seorim)』という物語であり、そこにはイランから西洋や中東を抜けて中国や朝鮮へと至る地理的なラインの存在がみとれる。伝説の美女であるソリムに関するその民話は、恋人の誘惑と喪失というテーマを含んでおり、その舞台は7・8世紀の、ペルシャからイランを抜けて中国の西安へと至るシルクロードとなっている。朝鮮においては『處容歌』に唯一みられるだけだが、こうしたモチーフそのものはこれらの場所でもとても人気のあるものであった。三角関係は当時の多くの物語における背景となっており、アラビア文化の影響を受けたペルシャの『アラビアン・ナイト』、そのペルシャ文化の影響を受けた中国の『ソリム』がその一例なのである。

次にテーマの点からは、女性とは何かという問題が『アラビアン・ナイト』と『處容歌』とにおいて重要な要素となっている。處容の不在、悪霊の侵入、そして夫の不在時における妻の裏切りは、女性のセクシュアリティの不可解さという問題を示し、そしてこの問題は永遠に理解し難い女性性についての、多くの類似した物語を生み出している。こうした女性のセクシュアリティがはらむ不思議や、男性が不可避的にこむる—女性に裏切られるという—運命を理解しようとする姿勢は、生命と宇宙における神秘を解明する試みへと至る。そしてこの探求は、結局はそのような性における逸脱と愚かな行為の無益さを悟ることになり、通常はその無駄な探索を終えるという結果になる。要するに、女性についての問いは、生命と世界の理解に関わるものであり、それは賢明な努力によって悪を打ち倒した後に、結果的に主人公を善良な意思と行為へと立ち返らせるのである。このような女性を巡る問題は、単に倫理に関係しているだけでなく、人間を悟りへと導くはたらきもする。この点において、妻に対する處容の反応は、この過程の成就を示す典型となっているのである。

第三の重要な類似性は、世界の不思議についての悟りを導くために、悪役を取り入れていることである。處容の葛藤で中心部分を占める悪霊は、『アラビアン・ナイト』での三角関係のモチーフにおいて重要な働きをする黒い色をした召使もしくは超自然的な「魔人(Jinnis)」と似た存在である。また『ソリム』では悪の存在は王の甥によって演じられている。彼らは詳細においては様々に異なっているが、不義を犯す悪霊の諸変形にすぎない。『處容歌』における悪霊は、女性の登場人物を監禁する邪悪な「魔人」のようである。「魔人」は、神性を示す色とみなされている黒い衣装を着ている。この種の黒色は、時には黒人によって表されるのだが、スーフイズムにおいては宗教的な意味合いを持っている。『處容歌』では、處容の青い服は海の息子の色として、そして悪霊の黒色にまざるものとして解釈されるだろう。

『處容歌』における性的快楽の描写をイスラムのスーフイズム詩人たちの詩作品における描写と比較すると、スーフイズムにおける上述した要素は、両者のより確かな関係性を示し始める。実際に、『處容歌』でのエロティシズムの描写は、スーフイズムの詩におけるものと類似している。これらの詩の中心となるテーマは恋愛である。「これは人間との恋愛であり、様々な人間がそこでは象徴的な存在として表現されている。」特に三角関係は、イスラム教スーフイズム詩に共通するテーマである。それらに含まれている「複雑な関係と恋愛の物語」は、女性の美しさとその求愛者についての多くの様々な物語へと変形されてはいるが、しかしそれらにも三角関係のモチーフはまだ確かに残っている。そして『處容歌』における三角関係もまた、ペルシャから中国を抜けて、最終的に朝鮮へと達する、東方へ伝わった「愛するものが誘惑される」というモチーフの影響の表れなのである。

4. 處容の文化とスーフイズム

『處容歌』におけるエロティシズムは、一般の人々が普通そう解釈するような、倫理や社会正義だけに関わっているわけではない。なぜならそれはまた困難を克服することに対する宇宙論的な象徴でもあるからである。この点において、處容の文化が“Byeoksajinkyung”の儀式へと変形され、そして重意義深いものとなっていることに注目したい。儀式の間の處容のダンスにおいては、彼の衣装の色が強調されている。彼の衣装の“Ohbansak”(5つの極彩色)は、宇宙の秩序を表現する方法であるが、独特な性的意味合いを含んでいる。Honggu Leeによると、その衣装は桃の花や巻きひげなどのような植物で飾られており、それはまるで母なる大地に撒かれた花綱を意味しているようである。くわえて、處容の服装、特に彼の四角の帽子とアクセサリーなどは、非常に女性的なものであり、女性のセクシュアリティを象徴する桃の花で飾られている。そのような官能的で女性を思わせる衣装を使う意図は、『アラビアン・ナイト』のようなスーフイズムの文学の雰囲気と考慮すると、より明白になるだろう。

衣装、踊り、そして祈りといったこれら全ては、處容の文化の最も重要な要素であるが、スーフイズムにおいてもまた特別

な重要性を持っている。スーフィズムは近東における大地を崇拜する民間信仰の伝統とインドの神秘主義の両方を吸収したのだが、それゆえに正統的なイスラムとは異なった特徴を持っている。その違いのひとつが踊りである。スーフィズムは聖なる動きと踊りを、神と結合するための精神的苦行として重要視する。ジクルの詠唱と共に演じられるこの踊りは、忘我の境地に達するための「大地の踊り」として知られる土着の文化的行為をその元としており、その踊りは魂がはらむ宇宙の秩序を示す円もしくは渦巻きを表している。悟りを開くための精神的苦行として、何人かの僧が繰り返して円を描きながら歩く。その円環の動きは、處容の踊りでもまた主要な要素となっている。マーティン・リングス(Martin Lings)が言うには「その身体は宇宙の軸を象徴しており、まさに『生命の木』である。踊りは忘我の儀式であり、中心が失われた感覚を表している」(84)。また Kuran における樹木崇拜はオリーブを対象とするが、處容の文化ではそれは桃か竹である。『處容歌』は新羅の民族歌謡を真似た朝鮮の歌であるが、それは木のイメージを使用した数多くの性的メタファーを含んでいる。處容の衣装にみられるような樹木のメタファーは、性的な儀式を通じて大地の聖性を示すもう一つの別の伝統である。スーフィズムでの儀式における踊りのように、處容の踊りは、高揚した愛の情熱における、自己と聖性との結合を表現しているのである。

スーフィズムと處容の文化とのもう一つのつながりは、それらの動きである。「スーフィズムでの踊りには、体をリズムカルに上下させる非常に規則正しい動きがある」(リングス 85)。處容の踊りもまた、スーフィズムのものによく似た垂直方向の動きを含んでいる。ある文書によると、音楽の中盤で太鼓奏者が太鼓の脇をたたくとすぐに、五人の處容の踊り手は背中を前に曲げ、腕を高く上げ、それからそれをひざの上に置かなければならない。輪になって円を描きながら行われる踊りの最中になされるそのような垂直の動きが、處容の踊りでは強調されている。Mokeumjip の 21 と 33 における“Gunahang”を含む多くの文書が處容の踊りにおける円環の動きの重要性を繰り返して述べているが、それらはスーフィズムの踊りにおいてみられる動きと類似している。自身の存在を高めることと自身を宇宙に結合させることは、處容とスーフィズムの踊りの両方にとっての真の目的である。スーフィズムが仏教と結合した時、それは悪から魂を浄化することにより涅槃に達するための苦行へと進化したのである。處容の踊りにおいては、災厄から解放され神聖に達するための身体を用いる儀式は、衣装を精神の代用物として強調する。それゆえに、スーフィズムの踊りの動きに似たやり方で處容が踊り歌う時、彼はスーフィズムの僧でもあるかのようなのである。

5. 結論

本論は『處容歌』とスーフィズム、すなわちアラビア文化のうちの一つとの間の関係性を提示しようと試みてきた。『處容歌』と『アラビアン・ナイト』における、愛する人が誘惑されることによる三角関係、女性の登場人物による性的逸脱、そして魔力を持った神秘的な悪霊の存在というモチーフの意義を考察することは、その二つの世界の間での様々な形態での文化的交流をあらわにすることをそのねらいとしていた。宇宙における人間と神秘とについてのメッセージを述べる方法として、それらは多くの点において類似点をもっている。両方の作品で表現されているエロティシズムは、登場人物に悪に対抗しながら悟りを開かせる仕掛けを与えている。両者の間にあるこれらの緊密な関係を示すために、本論は『アラビアン・ナイト』と照らし合わせながら『處容歌』のスタイル・テーマ・語りの構造を検証し、そしてまた處容の衣装と踊りとをスーフィズムのそれらと比較した。本論は最後で大胆にも、處容がもう一人のスーフィズムの僧であると述べた。これは『處容歌』において表現されているアジアの諸文化の交流を強調するためである。この意図にはまた、異国性が處容の文化における重要な一部として、文化を通じて伝達されまた完全に吸収されたことの意義と、朝鮮における長い歴史を通じてそれが示してきた魅力に光をあてることも含まれている。最後に、様々な文化的層の上に中世アジア文化が地球規模で残した跡を、読者が再考し再評価するきっかけを、本論が与えられたならば幸いである。